

ひろた まさき著

『福沢諭吉研究』

鹿野 政直

1

ながく福沢諭吉と格闘してきた著者が、全力をこめて世に問うた労作である。このあと著者は、おなじ人物を対象として、『福沢諭吉』（朝日評伝選12、一九七六年一二月）をだしたが、著者の論点は、ここでとりあげる作品に、よりまぎれなくうちだされている。そこで著者は、いささかも逃げをうたず、一切の先行学説をきりつつ、おのれみずからのこうだと信じる福沢諭吉論をみごとに提示しえた。

福沢諭吉への著者の視点ははっきりしている。「福沢の構想した近代文明社会そのものが問いなおされ、克服すべき対象となってきた」とはいえ、近代の克服は安易な近代の否定によってかなえられるものではない¹。そこで、「近代のもたらした遺産と問題性があきらかにされねばならない」。こうして著者はいう。「福沢の生みだした輝しい近代の部分でさえも現代にあつては重々しい桎梏となっていることの意味を、歴史的にあきらかにせんとする」（「まえがき」、傍点は原文、以下おなじ）と。戦後、封

建（遺）制への果敢な闘争者としてとらえられた福沢は、たぶんその反指定としての、脱亜論の主唱者と位置づけられる時期をへて、われわれにのしかかる「近代」の論理のもっとも包括的な体現者として、対象化されはじめたとの感をふかくする。

そのような視点から著者は、この書物で意図したことの特徴を三つあげる。第一は、「福沢の思想を、その形成過程から晩年にいたるまで追跡し、思想構造の特質とその変化を全体的にとらえよう」としたことであり、第二は、「福沢を歴史的に位置づけるために、伝統的諸思潮や同時代の諸思潮との関連を重視し、なかでも日本民衆の主体形成の歴史的特質とその可能性を視点として福沢を照らしだす」としたことであり、第三は、「福沢の思想を統一的にとらえるために、その論理構造の変化に注目し、その変化をそれまでの論理に内在していた諸要因とその時期の客観的情勢との関係、さらには彼自身の行動との関係において、とらえていこう」としたことである。

ここでのべられた三つのことのうち、第二の点は、著者が、福沢の研究者であるとともに民衆思想の研究者であるところから、必然的にもたらされる視角である。とくに近年、急激に（といっていると思うが）、「奈落」と「辺境」への関心をふかめていった著者が（啓蒙思想と文明開化²、『講談社 日本歴史』14「近代」1所収、一九七五年）、その対極に位置するとも思われる福沢をどうあぶりだすかは、読者にとってはもっとも興味あるポイントとなる。これにたいして第一の「思想構造」と第三の「論理構造」のちがいは、すでに田崎哲郎も指摘しているように（書評、『史学雑誌』第八六編第一号、一九七七年）、いま一つはつきりしな

い。しかしして区別をつければ、第一の点は、これまでおもに問題とされてきた啓蒙期以外に、思想形成期と後期、ことに前者の究明を行なったことを強調しているのになし、第三の点は、福沢の思想の構造的な把握を説いたものといえるだろう。読んでみての感想では、思想形成期の究明はなかなか面白かったのになし、思想の諸側面への言及は意外に少なかった。

そうして著者が、第一と第三の点をつうじて力説したかったのは、福沢の思想を研究するには、全時期をつうじて統一的な構造的に把握しなければならぬし、自分はそれをなしたとげた（といっている）ければ、敢然と（このこと）というのであった。ではながかつたかれの思想的生涯をどのようにとらえるか。その場合の自分の立場を著者は、「まえがき」と、それから序章「最近の福沢論吉研究について——遠山茂樹・安川寿之輔の成果を中心に——」で、研究史を整理するあたりではっきりうちだしている。

福沢の思想は変化したのか、あるいは終始一貫していたのか。

前者とすれば、かれの思想は啓蒙期からの後退過程としてとらえられ、後者とすれば、のちの国権論ないし露骨な富者の論理の展開は、その本質顕現過程にはかならないことになる。著者は、遠山茂樹『福沢論吉——思想と政治との関連——』（一九七〇年、東京大学出版会）を前者の、また安川寿之輔『日本近代教育の思想構造』（一九七〇年、新評論）を後者の、それぞれ典型と位置づけている。それでは著者の立場はどうか。それを「転回」として区切るところに、著者の主張の根幹がある。こうして本書は、第一章「福沢論吉の少年時代」、第二章「福沢論吉の青年時代」という、思想形成期をあつかった二章につづき、第三章「日本啓蒙主

義の展開——福沢における第一の転回——」、第四章「日本啓蒙主義の凋落——福沢における第二の転回——」、第五章「福沢における第三の転回」と、三つの「転回」をもって構成される。「転回」とは論理の変化をとまなうのかどうか、いささか曖昧であるが、それについては著者はつぎのようにいう。「福沢は国家独立・富国強兵の（大本願）においては終生変わることはなかったが、それゆえにその論理構造は質的な変化をもたざるをえなかった」。そのように変化説と一貫説を統一・止揚しつつ福沢をとらえようとしたところに、本書特有の視点がある。今後の福沢研究でうけつぐべき視点であろう。

2

福沢の少年時代・青年時代をあつかった第一・二章で、著者は重大な問題提起を行なっている。これまでこの時代ことに少年期の福沢については、わたくしをふくめて、ほとんど『福翁自伝』の祖述の域をでなかつた。著者も基本材料を『福翁自伝』によりながら、その批判的検討あるいはその読みかえをつうじて、べつの福沢像を提出した。その見解は、一言にいえば、年少期の福沢の基本的な志向を、反封建ないし封建からの脱走という従来の評価にかえて、立身出世主義と規定するところにある。

『福翁自伝』には、少年の論吉が身分制のためにどんなに屈辱感にさいなまれたかのエピソードが満載されている。そうしてそのエピソードの集積が、「門閥制度は親の敵」という有名な感懐に集約される。だが、著者は、それらの一つ一つに閑説したあげく、「それら不平不満がつねに自分より上位の存在に向けられて

いて、百姓・町人など民衆との関連で問題とされている事例は一つもない。「福沢の不平不満が身分制そのものに向けられたものかどうか疑問がある」とし（以上二二ページ）、また迷信の打破などの合理的精神の成長を示すエピソードについても、「つねに自らの優越と他者への蔑視を伴っている」とする（二七ページ）。そこから蘭学修業のための中津脱出（『長崎遊学』）も、「立身出世の好機」と意識されたであろうと断じ、その後の大阪での修業、江戸での開塾、幕臣への登用、二度にわたる洋行をその路線上に位置づけ、かの有名な『長州再征に関する建白書』に、幕府への自己の売り込みに胚胎する露骨な「マイト・イズ・ライトの論理」をみ（七二ページ）、『西洋事情（初篇）』も、幕府の意図にそった西洋文明の紹介であったとする。

『自伝』の矛盾をつき、後年からの心理の投影を読みとり、結果としてこれまでの福沢像をくつがえす著者の手法は、みごとというほかはない。ただ、ほとんど『自伝』によっているだけに、中津藩の知的状況や政治状況へのもっとくわしい観察や、幕末の蘭学一般へのよりひろい眼などが、今後、必要とされるであろうが、そういう立場からの福沢のとらえかえしを、読むものの心にあらためてかきたてずにはおかないほど、この把握は問題提起的でもある。「封建秩序からの脱走」ととらえてきたわたくしなど、本書で正面から批判されている一人だが、強烈な打撃をうけたという想いにとらえられた。この点はふかく心にとどめおき、つぎに福沢を論じる機会に、自分の考えをあらためてまとめたいと思う。

ただわたくしとしては、著者の論旨の展開に数多く示唆されな

がらも、つぎの二つの点を一言しておきたい。第一は、著者が、福沢を右のように理解するための基本的な視角を、「民衆」ににおいている点である。たとえばつぎのようにいう。「諭吉少年は、幕末段階の日本民衆が歴史的にきずいてきた様々の日常的合理性から多くのものを学びとりながらも、実はそこから民衆の生命力・創造力を感得するよりも、そこから学んだ合理的実験的精神を楯として逆に民衆を蔑視する傾向をもった」（三三ページ）。限定なしに「民衆を蔑視」とくくってしまうしかたにも疑問なきをえないが、それはここではおくとし、一下級武士の息子である福沢に、このようにいきなり「民衆」をもってくることは、対象とする人物への超越的な批判になりやすい。むしろかれを理解するうえにまず肝要なのは（ことに思想形成期をあつかうにあたっては）、オーソドクスな武士像から、その人物がどれだけあゆんだかあるいはあゆまなかったかを検討することであろう。そのときその人物の倫理観やつくりだしてゆく文体までふくめて、その意識の全体像があきらかにされることになる。「民衆」の論理とその人物のそれとをつきあわせるのは、そのうえで作業となるべきではあるまいか。

第二は、このように福沢の少・青年期を「立身出世志向」一色にぬりつぶすとき、幕府の倒壊から「平民」としての自立への行程は、どう解釈されるのだろうかという点である。著者はそれを、究極のところ著訳書出版による「生計上の見通しの自信」にともめているが（八八ページ）、この評価は、かれの決意をあまりに個人的事情に局限するものだといわざるをえない。武士意識↓官尊意識のさかんなかで、しかも「出仕」しないことが異心をい

だくとも臆測されかねないなかで、あえて平民として生きようとするのは、なんらかの『経世の志』なくしてはかなわぬことであった。それと、慶応義塾における人材養成とはもとより相かわっていた。著者も引いているが、「慶応義塾新議」で、「日本国中の、商工農士の差別なく」というような発想は、現状へのよほど透徹した認識がなければすらっとでてこない。

3

つづく第三・第四章と終章は、思想家としての福沢諭吉の論理をあとづけた章である。そのなかで著者は、種々の論点をだしつつ、全体として、歴史のなかにこれまでなかったほどみごとに、かつ精密に福沢を位置づけた。

著者のそうした特徴は、福沢の思想過程を、一八七四年および一八九一年できつたところにもっともよく示される。まず著者は、一七編より成り一八七二年二月から七十六年十一月にかけて刊行された『学問のすゝめ』を分析して（一〇五ページに著者は、この書物の初編を「七十二年十一月頃に草され、十二月に刊行を決意」としているが、なにかの勘ちがいと思われる）、その論旨が、一八七四年一月の民権議院設立建白書をもって、変化をみせはじめることを指摘する。つまり七三年成稿の第五編までは、「天賦人権論を原理として、一貫して『人は同等』『国は同等』を強調し、一身独立・一国独立をよびかけるものであったが、建白直後の『第六編』からは一身独立・一国独立のテーマは依然変らないけれども、『国法の貴き』『国民の職分』という論点の方にアクセントがかかってくる」とする（一七三ページ）。そうしてそれ

を「啓蒙主義の凋落」のはじまりとし、その「凋落」は、一八八一年の『時事小言』にいたって完結するという。幕臣福沢から啓蒙福沢への「転回」が第一の転回であるのにたいし、著者は、これを第二の転回とする。それによつて一八九一年の「貧富論」が第三の転回をなし、その背景には、一八九〇年の日本資本主義最初の恐慌があったとする。そのうえで著者は、それぞれの時期を、啓蒙期・土族期・大資本期とよぶ。

福沢の思想をどこで区切るかは、これまで幾度も問題とされてきた。そうしてその焦点は、一八七四〇七五年ころから八一年ころまで、とくに『時事小言』にあるとみなされてきた。そのなかで著者は、一八七四年と九一年をはっきりと提示し、しかもそういう転回の契機として民権議院設立建白書と恐慌をあげている。とともに、福沢の依拠すべきと考えた階層をも明示した。著者のいう「啓蒙」が一応、全国民を対象にしたと考えるならば、それは、全国民期・土族中産階級期・大資本期ともすることができよう。同時にその時期区分は、民権運動・労働運動というふうにおこってくるべき運動にたいする福沢の基本的な態度をも暗示する。だがそのとき、一八七五年の『文明論之概略』をどのように位置づけるのだろうか。それでも著者のいう第二の転回については、著者ほど明確にはなくとも諸人の注目するところであったが、第三の転回は著者の新見であり、福沢研究についての共有財産になるべき見解と思われる。ただし、福沢の資本家的立場、その労働者観については、これまでも家永三郎をはじめとして論及されてきたところを、多くでるものではない。

これを著者の論点の第一の特徴とすれば、第二の特徴は、第一

・第二章につづき福沢の思想を徹頭徹尾、「民衆」からきつたことにあろう。第一・第二章と異なり、ここでは福沢は一個の思想家として立っているのであるから、このきりかたは、さきの場合よりはるかに説得性に富んでいる。その場合、啓蒙期にあつては著者は、まず、対比の基準として「伝統思想」をもつてくる。これまで日本の啓蒙思想をみるにあたっては、しばしば西洋の一八世紀啓蒙思想が評価の軸とされてきたが、著者は逆に、日本の土壌にはぐくまれてきた思想を軸とするわけである。この場合の「伝統思想」が、士人の教養の中核をなしてきた儒教思想でなく、いわゆる民衆思想『「通俗道徳」であることは、著者の立場にてらして論をまたない。その結果、著者はほぼつぎのように総括する。』

「天賦人權論の功利的人間観にもとづく人欲解放の主張は通俗道徳における禁欲主義の対極にあり、その個人主義的な自由自主の主張は家族や村落の共同体を基体とした『自由自在』の獲得の志向との間に千丈の深淵をみななければならぬ」(一一四ページ。これは必ずしも福沢を対象としての言でないが、かれをも念頭においての総括とみられる。一六一ページ参照)。

この評価は、啓蒙思想が啓蒙の対象とした層のうちに、すでにより根源的な変革構想が生まれていたこと、それを啓蒙思想が看取しなかったことを指摘して、「民衆」のがわからみて啓蒙思想を相対化しようとした点で、日本思想史にあたりしいパースペクティヴをひらこうとするものだと見える。しかし著者は、「民衆」ということばで事実上、文明への反乱の衝迫をもつ「底辺民衆」をほとんどもっぱら想定している。が、この時期の歴史段階からみて「政治主体」としての登場がまず可能だったのは、「豪農層」

であり、かれらの覚醒に福沢の論理がはたらいたことは、もっと強調される必要があろう。さもないと、著者みずからいうところ(一六一ページ)、福沢への「ないものねだり」になるおそれがある。とともに、かれらのもった反封建のエネルギーを過小評価することになる。そればかりではなく福沢は、他の同時代人にはほとんど類例をみいだしがたいほど、民衆のもっていた事大主義その他精神的な障壁を、歯切れのよい口調でうちくどうとした。著者によれば、それもまた、「平等」よりは「一身独立」を優先させた言説とみられるのかも知れないが、そのように裁断してとらえることは、当時の日本の、ひいては現代日本の、かかえている思想的課題の困難さを、故意に近代否定の方向に単純化してしまうことになりはしないか。

この労作に敬意を表しつつも、それが福沢の全貌をとらえようとしているだけに、最後に二つのことを指摘しておきたい。その第一は、著者の主要な関心がほとんどもっぱら政治思想に向けられていることである。そうして倫理思想の面あるいは丸山真男が強調した価値観の転回の面は、正面きつてとりあつかわれていない。ふれられても、たとえば、「合理精神を私的領域で発揮する狭小な世界の主人公」というふうに(二三九―四〇ページ)、政治よりも劣位の境域と位置づけられている。福沢が好んで非政治的領域に発言したのは、政治からの逃避という一面もたしかにあった。しかしより基本的には、政治のみが一元的な価値であるような固定観念をくつがえそうがためにほかならなかった。第二は、福沢の国際観ことにアジア認識を大幅に捨象したことである。だがこの問題は、幕末に「文明」にめざめて以来、かれの思索を一

貫してとらえてきた要素であって、それへの論及なくしては、これの思想を具体的状況のもとで把握したとはいえないであろう。

(A5判 二八一頁 一九七六年二月 東京大学出版会 二七〇〇円)

(早稲田大学教授)

Eric Bournazel

*Le gouvernement capétien au
XII^e siècle, 1108-1180.*

*Structures sociales et mutations
institutionnelles.*

江 川 温

一一、一二世紀のカペー朝は歴史研究のテーマとしてはきわめて地味なものである。この時期の諸王はイール・ド・フランスを中心とした国王直轄支配圏(カペー家領邦)の拡大と安定化、直轄領の経営改善等の地道な努力を重ねつつ、全王国に対する封建的宗主権の主張を維持して一三世紀の飛躍に備えていた。これらの基本的諸政策は既にリュシエール、フォーティエ、パコー等によって定式化されているといってもよい。しかるにこの時期の統治の具体的なあり方については多くのことが不明のままである。

一九六五年にルマリニエは『カペー朝初期の国王統治』*Le gouvernement royal aux premiers temps capétiens (987-1108)*を著し、国王文書の文書学的検討を通じて一一世紀の王政の実質を明らかにしようとした。その結果国王の中央行政の一一世紀における変動がある程度明確となった。すなわち一一世紀を通じて国王文書副署人は司教及び領邦君主、フランクシアの伯といった高級貴族層からイール・ド・フランスを中心とする地域の城主、騎士